# 古英詩短編集（一）

藤原保明

## まえがき

本稿は七点の古英詩を日本語に翻訳し、注と解説を施したものである。これらの詩はいずれも短編であるが、叙事詩、宗教詩、その他のジャンルの詩として鑑賞に値するのみならず、文学や語学上の貴重な情報源となっている。たとえば、最初の『フィンズブルグの戦い』は『ベーオウルフ』の中の「フィンの挿話」の前段階を成すものとして、『ワルデレ』は大陸の同一の物語群との比較の対象として、『ケドモンの賛歌』は詩の由来が明らかで、キネウルフと並んで詩人の名前が特定できる作品として、四番目の『十字架の夢』は古英語で書かれた宗教詩の最高傑作として、『脚韻詩』は頭韻に加えて脚韻も盛り込んだ作詩の技巧の頂点に立つ詩として、さらに、『デーオル』は当時の吟遊詩人の苦悩と、消失してしまった昔の物語を知る手がかりとして、最後に、『ウィードシース』は英語の詩としては最古の一つとして、また、当時の宮廷人が好み、詩人たちの脳裏にあった英雄や部族の物語の概要を知りうるものとして、それぞれ独自の存在価値を保っている。このことは、わずか九行から成る『ケドモンの賛歌』は別として、どの詩もこれまで単一の研究書や注釈本が何冊も刊行されてきたことからも明らかである。それゆえ、今回の日本語による現代口語訳はさまざまな分野で多くの貢献をしうるものと期待できる。なお、訳文中の…はすべて写本上の欠落ないしは不鮮明な箇所を示し、（　）は訳者の補足を表すものとする。固有名詞はなるべく古英語の音読みに近づける

ように試みた。

**フィンズブルグの戦い**

「…決して破風が燃えているのではない。」[一]そして、戦に不慣れな王[二]は叫んだ。「これは東から夜が明けてきたのではなく、龍がこちらへ飛んできたのでもなく、また、館の破風が近くで燃えているのでもない。そうではなく、（敵が武具を）こちらへ運び、鳥が（戦の）歌を唄い、灰色に包まれたもの[三]が吠え、戦の木[四]がうなり、盾が（槍の）軸を受け止めようとしているのだ。これから月はさまよいながら雲間から輝き、この（デネ族の）人々の恨みを買う悪事[五]がなされようとしている。しかし、兵士たちよ、今から起き上がり、自分の盾を取り、武勇を忘れず、率先して戦い、勇敢であってくれ。」（一－一二）

すると、黄金に飾られた多くの戦士たちは起き上がり、剣を身につけた。そして、高貴な兵士シイェフェルスとエーアハは扉のところまで行き、剣を抜いた。別の扉にはオルドラーフとグースラーフが立ち、さらに、ヘンイェストは二人の後ろに立った。一方、（敵方[六]の）グースヘレは、戦に強い男（シイェフェルス）が狙っているため、大切な自分の体と甲冑を先頭に立って館の扉まで運ばないようにと、ガールルフを引き留めた。しかし、この勇敢な戦士はこの扉は一体だれが守っているのかと（館の中の）全員にあからさまに問いかけた。すると、シイェフェルスは叫んだ。「わしの名はシイェフェルスだ。わしはセッジ族[七]の族長で、広く世にその名を知られた豪傑だ。わしは数々の苦難と激しい戦を経てきた。おまえがわしから生と死のどちらを得ることになるのか、すでにこの世で定められている。」（一三－二七）

それから、館の中で殺戮の打撃の音が響き、骨を守る物、すなわち、円形の盾は勇者の手の中で打ち砕かれる運命にあった。館の床は地響きを立てた。しばらくして、グースラーフ[八]の息子ガールルフはその土地に住む人としては最初にその戦闘で倒れ、ついで、彼の回りには多くの勇者、頼もしい兵士たちの体が横たわった。黒と褐色の渡り鴉は飛び回った。刃がきらめく様子はまるでフィンの館全体が火に包まれているようであった。六〇名の勇敢な兵士が戦でこれほど立派に、しかも堂々と振る舞い、そして、これらの兵士たち、若い従者たちが澄んだ蜂蜜酒に対してこれほど立派にフネフに報いたという話を私はこれまで外に聞いたことはない。（二八―四〇）

彼らは五日間戦い続けたが、（フネフの）従者はだれ一人倒れることなく扉を守った。さて、傷ついた勇士[九]はその場を離れ、鎖帷子が壊れ、武具が役に立たなくなり、おまけに兜は穴だらけになったことを嘆いた。すると、人々の守り手[一〇]はあの兵士たちはどうして傷つかなかったのか、あの若い二人の兵士たちのどちらが…と彼に尋ねた。（四一―四八）

## ワルデレ

### I

…彼女[一]は懸命に彼[二]を励ました。「本当に、ウェーランドが鍛えて作った鋭い剣ミムミングは、それを握りしめることのできるいかなる人も裏切ることはありません。兵士たちが戦闘で刀傷を負い、次々と血に染まって倒れることがこれまで何度もありました。エトラの武将[三]よ、今日はまだ力をゆるめたり、勇気を…（惜しんでは）いけません。エルフヘレの息子よ、命を落とすか、それとも、人々の中で末長い栄光を手にするか、二つに一つのことをすべ

き日がやってきたのです。この戦で多くの敵が剣であなたの甲冑をたたき割ったとしても、また、不名誉なことに、あなたがあらゆる男との合戦に背を向け、土塁に逃げ込んで命を守るのが目撃されたとしても、私は味方であるあなたを決して口に出して非難することはありません。それどころか、あなたはいつも戦を先へ先へと、合戦を次々に進めようとしてきましたから、私はあなたが戦を、野営地での他の男との合戦を強く求めすぎるというあなたの宿命を恐れているのです。神のご加護があるかぎり、手柄をたてて自分の名誉を高めなさい。剣のことを気にしてはいけません。あなたには（私たちの）味方として最高の宝物が与えられているのですから。あなたはその剣をふるってグースヘレの鼻をへし折らねばなりません。卑怯にも戦を最初にしかけたのはあの男なのですから。あの男はその剣と貴重な器とたくさんの宝環を（受けとることを）拒否したのです。[四] これからあの男は宝環を持たずにこの戦場から立ち去らねばなりません。王は郷里に戻るか、それとも、その前に倒れねばなりません、もしこれから…。」（一一三二）

## II

「宝石をちりばめた鞘の中に私がそっと収めている剣を別にすれば、これ以上の剣は…。セーオドリーチはその剣とたくさんの宝石と贈り物をウィディアに送り届け、その外に、多くのものを黄金で飾るつもりでいたことを私は知っている。ニスハードの血族でウェーランドの息子であるウィディアは、セーオドリーチを捕虜の状態から救い出したため、そのかつての手柄に対して報酬を受けた ―― 彼は巨人族の領地を急いで逃れた。」（一一一〇）

勇敢な兵士ワルデレは語った ―― 彼は手の中に戦の慰めである鋭い剣を握りしめ、次のように言葉に出して言った。（一一一三）

「そうだ、ブルイェンド族の味方であるおまえは確かにハイェンの手が私に戦を挑み、歩兵戦を避けることを望ん

でいた。おまえに勇気があるなら、このように戦い疲れた私からこの灰色の鎧を奪い取ってみよ！エルフヘレの家宝は私の肩の上にある ―― 立派で網目状の、黄金で飾られた鎧は、高貴な人が身につけ、その手で敵から命を守ろうとする時、全く不死身の防具となる。おまえたちが私に挑んだように、邪悪な血族の者たちが再び槍で私を攻撃し、剣で私に挑戦したとしても、この鎧は私を裏切ることはない。それどころか、正しいすべてのことに対して常に迅速で思慮深いお方は私に勝利を与えてくださるであろう。聖なるお方に援助を願う者は、前もってそれにふさわしい配慮をしていれば、神のご慈悲はすぐに得られる。その時、誇り高い者たちは富を分け与え、財宝を支配できる。それは…。」（一四―三一）

**ケドモンの賛歌**

永遠の神はすべての奇跡の始まりを定められたため、我々はこれから天の王国の守護者、創造主のお力、および、そのお心、栄光の父の偉業を称えねばならない。聖なる創造主はまず最初に人間の子供たち[1]のために屋根として空をお造りになられた。人類の守護者、永遠の主、全能の神はその次にこの世を、大地を人間のために創造なされた。（一―九）

**十字架の夢**

さて[1]、人間が寝床に横たわる真夜中に私が見た夢の中で最も素晴しいものについて話そう。（一―三）

私は驚くべき木、樹木の中で最も輝かしいものが光に包まれて高々と掲げられるのを見たように思った。その標識

は全体が黄金で飾られていた。宝石が大地の表面から美しい光を放った。十字架の上部の交差部分にも五つの宝石が据えつけられていた。掟によって美しく定められた主の天使たちは全員それを見つめた。事実、それは邪悪な者の十字架ではなかった。聖霊たちと地上の人間とすべての栄光の被造物はその場で十字架を見つめた。（四－一二）

勝利の木は素晴しかったが、私は罪に汚れ、悪事に染まっていた。私は栄光の木が旗で飾られ、黄金をちりばめられ、綺麗に輝いているのを眺めた。宝石は支配者の木を華麗に包んでいた。しかし、私はその黄金を通して惨めな人間たちの昔の苦しみを、すなわち、その十字架がかつて右側から血を流したことを見ることができた。私は全くの悲しみに捕らわれた。私はその美しい幻を恐れた。私はその輝かしい標識が装いと色を変えるのを見た。それはある時は水に濡れ、流れる血に染まり、またある時は宝物で飾られた。私はその場に横たわり、悲しみに沈みながら、救世主の木を長い間眺めていた。やがて、私はその木が語るのを聞いた。最も優れたその木は言葉を発した。（一三－二七）

「ずいぶん昔のことであるが、私は今でも覚えている。私は森のはずれで切り倒され、幹から離された。腕っ節の強い敵はその場で私を捕まえ、私を自分たちの見世物として形を整え、彼らの罪人たちを担ぎ上げるよう（後で）私に命じた。人々はその場で私を肩に乗せて運び、しばらくしてから私を丘の上に立て、そして、多くの敵は私をそこにしっかりと固定した。その後、私は人類の主が私の上に乗るためにとても急いでおられる姿を目撃した。私は地の表面が震えるのを見たが、主の言葉に逆らってその場で身を屈め、折れたいとは思わなかった。私には敵を全員打ち倒すことは可能ではあったが、（そうはせずに、）しっかりと立っていた。」（二八－三八）

「それから、この若くて強い勇敢な英雄は ―― それは全能の神であられたが ―― 衣類をお脱ぎになられた。主

は人類の罪を償いたいと思われた時、多くの人々の見守る中で勇敢にも高い十字架に登られた。この勇士に抱きしめられた時、私は震えたが、身を屈めて大地に倒れずに、しっかりと立っていなければならなかった。私は十字架として立てられた。私は強力な王、天国の主を持ち上げ、体を曲げることはなかった。人々は黒い釘で私を貫いた。その傷は、すなわち、悪意によって口を開けられた傷は、今でも私の上に見られる。私自身はだれ一人傷つけなかった。彼らは我々二人[二]を嘲った。主が魂を送り出された時、その脇腹から流れ出た血で私は全身真っ赤になった。私は丘の上で多くの過酷な試練に耐えた。万民の神が残酷なことに体を伸ばさせられるのを私は見た。暗闇は幾重もの雲によって支配者の亡骸を、美しく輝くものを包み込んだ。黒い影は雲の下を進んだ。すべての被造物は王の死に涙を流し、嘆き悲しんだ。キリストは十字架にかけられたのだ。(三九―五六)

しかし、遠くからその王を急いで訪れる者たちがいた。[三] 私はその一部始終を眺めた。私は悲しみのあまり激しく心を乱していたが、その男たちの手の方へ、控えめにではあるが心をこめて、身を屈めた。彼らはその場で全能の神を抱きかかえ、主を激しい苦痛から解放した。その戦士たちは私を血まみれのまま立たせておいた。私は槍で傷だらけとなっていた。彼らは手足の萎えた主をその場に横たえ、主の亡骸の枕元に立った。彼らはその場で天国の主を見守った。主はひどい苦難の後、しばらくその場でぐったりと横たわっておられた。人々は殺害者の見えるところで主の墓を作り始めた。彼らは輝く石を刻み、その中に勝利の支配者を安置した。夕方になると、悲惨な者たちは主のために葬送の歌を唄い始めた。それから、彼らは疲れ果て、栄光の王の元から立ち去った。主はたった一人でその場に体を横たえておられた。」(五七―六九)

「しかし、人々の嘆き悲しむ声が上がってから、我々は涙[四]を流しながらかなり長い間その場に立っていた。魂の綺

麗なすみかである亡骸は冷たくなっていった。すると、人々は我々をすべて大地に倒し始めた。それは恐るべき出来事であった。人々は我々を深い穴に埋めてしまった。しかし、主の使徒たちと味方の者たちは私のことを伝え聞き、…私を金と銀で飾った。[六]」（七〇―七七）

「さて、私の親愛なる人[八]よ、これで私が邪悪な者たちの仕業によるひどい苦痛に耐えてきたことが分かるであろう。地上の人間があちこちで私を崇め、すべての栄光の被造物がこの標識に祈るべき時がやってきた。神の御子は私の上でしばらくの間苦しまれた。そのために、今、私は天の下で栄光に満ちてそびえ、私を恐れるすべての者を癒すことができる。私が言葉を伝える者たち[七]に命の正しい道を開くはるか以前は、私は最もむごい刑罰、人間にとって最も厭わしい物であった。その後、栄光の主であられる天の王国の守護者は森のどの木にも勝る名誉を私に与えてくださった。それは、全能の神がすべての人の前でその母マリアをどの女性にもまして称賛なされたのと同じであった。」（七八―九四）

「さて、親愛な人よ、あなたに頼みたいことがある。この幻について人々に語り、全能の神が人類の多くの罪とアダムの昔の仕業のために苦しまれた栄光の木はまさにこの木であることを言葉によって明らかにして欲しい。神はこの木の上で亡くなられたが、人間を救済なさるために、その偉大な力によって後によみがえられた。神はそれから天国へと昇られた。全能の神であられる主は、最後の審判の日に、人類を訪れるためにみずから天使たちを連れて再びこの世界へ来られる。そして、審判の権限を持っておられる主は、この地でのはかない生涯においてこれまで成した功罪に応じて、すべての人を裁かれる。その時、支配者が告げられるお言葉を恐れない者はいないであろう。主は、かつて自分が十字架の上で味わったとの同じように、神の名前ゆえに痛々しい死を味わおうと望む者はどこにいるか

と大勢の前でお尋ねになられるであろう。しかし、その時は人々は恐怖のあまりキリストに向かって何といえばよいのか、ほとんど思いつかないであろう。しかし、最も優れた印[八]をかつて胸の中に抱いたことのある人はだれも恐れる必要はなく、主と共に住むことを願うすべての魂は十字架のおかげでこの地上から神の国を訪れることになる。」（九五－一二一）

それ以降、私は連れがいないたった一人の時、心から喜んで熱心にその木に祈った。心はしきりに私から出て行こうとし、私は（十字架に対する）あこがれに耐えかねた。今、私には命の喜び、すなわち、他のすべての人々よりも多く、一人でその勝利の木を訪ね、十分に崇めることができるという喜びがある。その木に対する思いは私の心の中に強くあり、私の思いは十字架を守ることに向けられている。私には力のある味方はこの世には多くはいない。いや、そういう人々はすでにここから、すなわち、この世の喜びから離れ、栄光の王の元を訪れている。今、彼らは父なる神と共に天国に住み、栄光の中にいる。私がかつてこの地上で見た主の十字架が、このはかない命から私を連れ出し、天国の喜びという大きな幸せのあるところ、神に（愛された）人々が祝宴の場で座るところ、絶えない幸福のあるところへと私を導いてくれる時を、私は毎日待ち望んでいる。その時がくれば、十字架は、私が後で栄光の中で暮らし、聖者たちと共に喜びを十分に受けられるところへ私を導いてくれるであろう。主よ、人類の罪ゆえにかつてこの地上の刑罰の木の上で苦しみを受けられたお方よ、私の味方であってください。主は我々を救済なされ、我々に命と天の王国での住まいを与えてくださいました。火の苦しみを味わった者たちには、祝福と喜びによって新たな希望がわいてきた。神の御子は力強く、首尾よくその旅[九]に勝利をおさめられた。その時、全能の主は、大軍を引き連れ、魂の群れと共に、天使たちとかつて天国で栄光に包まれて住んでいたすべての聖者たちの喜びとして、神の王国へと来られ、

彼らの支配者であられる全能の神はその故国へと戻られたのである。（一二二―一五六）

**脚韻詩**

この（世に）光を現され、（その光でこの世を）美しく飾って明るく照らしてくださったお方は私に命を授けてくださいました。私は神の恩寵による姿と花々の色で美しく飾られ、喜びであふれていた。人々は私を眺め、（私の誕生を祝う）祝宴は途絶えることはなく、人々は（私という新しい）生命の贈り物に喜んだ。飾り立てられた馬は長い脚で大股に歩み、私を乗せて草原の上を運び、私を喜ばせ、楽しませてくれた。その頃、空の下のこの世は草木によって目覚め、活気づき、飾られ、果実を結ぶ力にあふれていた。客は（私の元を）訪れ、冗談を交え（て話し）、喜びに浸り、楽しさで顔をほころばせた。動く物体[二]は広々とした海を遠くまで滑るように走った。潮の流れの上には一筋の航路ができ、船は私をその上に置き去りにすることはなかった。私は高い地位にあり、勇士の一隊が馬で乗り入れる館の中で何一つ不自由しなかった。兵士たちはしばしば館に留まり、その館の中で自分たちを喜ばせる宝の山を眺めた。私が権力を握っている間は、勇者たちは私を称え、戦では私を支援し、厳重に護衛し、敵から守ってくれた。このように、素晴しい贈り物は私を満足させ、家来たちは私の周囲にいてくれた。私は家や領地を保有し、どこへ行っても大地が生み出す物を手にすることができた。私は玉座にあり、魔術のように言葉を操った。友愛の喜びは消えることはなく、実り豊かな歳月が続き、竪琴の糸は音を奏で、涙の筋は長く続く友愛の絆によって断ち切られていた。家来たちは勇敢であり、竪琴は響き、大きな音をたて、歌声はこだまし、楽隊は美しい曲を奏で、少しも弱まることはなかった。館の広間は（音で）震え、美しくそびえ立った。（兵士たちの）勇気は増大し、繁栄が訪れた。私は諸

侯には分別をもって接し、勇者たちを豊かにした。勇気は勇気を呼び、心は躍り、信頼感は広がり、栄光は満ち、精神は高揚し、…私は黄金を（家臣たちに）贈り、宝石を手渡した――（もっとも、）財宝は（人の心を）惑わせ、愛情は薄れていくものだ。（一―三七）

私は甲冑を身につけて勇ましく、飾り物をつけて品格があった。私の楽しみは君主にふさわしく、生き方は（国民に）希望を与えるものであった。私は国土を守り、国民には情け深かった。私の一生は長い間栄光に包まれ、国民と共にあり、備えは万全であった。（三八―四二）

（しかし、）今、私の心は沈み、嘆かわしいほどに塞ぎ、難局にさしかかっている。これまで、昼間は親しげだった人も、夜になると逃げ出そうとする。今では私の苦しみは大きくなり、胸の中で膨れあがり、飛び出るほどに広がり、心の中に深く食い込んでいる。邪悪さも心の中で大きく膨らんできた。圧迫された際限のない悲しみが心の隅々にまで襲い来たり、罪に駆り立てるように燃え、激しく動き回っている。疲れ果てた男[一]は苦しみ、長い旅に出かける。（しかし、）この男の心の痛みは止むことなく、悲しみは募るばかりだ。この男の人生は終わりに近づき、幸福は失われ、力は失せ、もはや喜びで胸が高鳴ることはない。このように、この世での喜びは失せ、権威も地に落ち、人々はこの世で命を捨て、しばしば悪事を好むようになった。忠誠心は極度に薄らぎ、もろくも捨て去られしまい、高い位置から落ち、そして刻々と悪化していった。（四三―五八）

このように、今や世の中は移ろいゆき、運命を投げ出し、憎しみを追い求め、人間を堕落させている。人類は滅びゆき、恐ろしい槍は人を傷つけ、裏切りは横行し、槍は研がれ、借財の苦しみは心をむしばみ、老いは勇気をくじき、流浪の時は人を苦しませ、残酷さは誓いを汚し、苦悩は絶え間なく続き、死の恐怖は忍び寄り、激しい憤りは（しわ

を）刻み、刻まれたものは…を持ち、眩しい白さは汚され、夏の暑さは冷え、この世の富は朽ち、憎しみは募り、世俗の力は衰え、勇気は減退していく。（五九－六九）

矢のように早く過ぎ去る昼が容赦なく私を掴み、私に故国を捨てさせ、そして、私がこの地上にいることを咎める夜が近づくと、運命の計らいにより、当然の報いとして、私は自分で墓を掘る。私はその悲惨な墓から自分の肉体を抜け出せなくなる。すると、私の肉体は横たわったままの状態にあり、うじが私の手足をむさぼる――いや、奴等は自分たちの楽しみを求めて戦うのだ――そして、骨だけ…になるまで餌をとる。そして、ついに、邪悪な行為に対して懲罰の鞭がやむなくこの世で裁断を下すこと以外に何もなくなってしまう。（しかし、良い行いに対する）栄光は消滅することはなかった。神に祝福された者は前もってこのことを考え、しばしば悩み、厳しい罪から身を守り、より良い喜びを願い、神の恩寵の喜びを忘れることはない。天の王国には楽しい慈悲という幸福がある。さあ、急ごう、聖人たちのように罪から開放され、悪行から離れ、栄光に包まれ、人類が創造主の前でうれしそうに真の神を眺め、永久に平和を楽しめるところまで。（七〇－八七）

**デーオル**

勇敢な兵士ウェールンドは自分が（鍛えて造った）剣によって迫害され、苦難を味わい、苦痛と不快、厳冬の流浪を自分の伴侶とした。ニースハードが自分より優れた男である彼に足枷を、筋肉を縛る細い輪をはめて以来、彼はしばしば悲惨な思いをさせられた。（一－六）

その苦しみも過ぎ去った。この苦しみもそうなりますように。ベアドヒルドにとって、自分が身ごもったことがはっ

きりと分かった時、兄の死は自分の境遇以上に心に疼くものではなかった。これから先一体どうなるのか彼女は全く思いもつかなかった。(七―一二)

それも過去のことになってしまった。このこともそうなりますように。我々多くの者が伝え聞いた話では、メースヒルドに対するイェーアトの愛は際限なく深まり、この悲恋は二人から眠りをすっかり奪ってしまったそうだ。(一三―一六)

その恋も終わった。この苦しみもそうなりますように。多くの人々に知られているように、セーオドリーチは三〇年間メーリング族の城で君臨していた。(一七―一九)

それも過去のことになってしまった。これもそうあってほしい。我々はエオルマンリーチの残忍な心根を伝え聞いている。彼はゴト族の王国の人々を広く遠く支配していた。彼は恐ろしい王であった。多くの兵士は悲しみに捕らわれ、不幸を期待しながら、この国が征服されることをしばしば願った。(二〇―二六)

それも終わった。これもそうなりますように。悲しみにくれる者は喜びを奪われて座り、沈痛な気持ちに襲われる。この男にとって、苦難の大きさは計り知れないように思われる。そこで、彼は願う ―― 賢明な神がこの世の至るところで大きな変革をなさり、多くの人々に恩寵と真の繁栄をお与えになり、一部の者には多大の苦しみを与えられんことを。(ところで、)私は自分自身のことについて次のように語りたい ―― 私はかつてヘオデニング族の吟遊詩人として主君に寵愛されていた。私はデーオルと呼ばれ、長い間立派な職につき、慈悲深い主君に仕えていた ―― それは、貴族たちの守護者が以前私に与えてくださった土地の権利を歌の才能に秀でた男ヘオルレンダが握るまでのことであった。(二七―四一)

それも過ぎ去ぎてしまった。これもそうなってくれればいいのだが。（四二）

**ウィードシース**

人間としては最も多くのこの地上の部族と国を訪れた男ウィードシースは語り、言葉の宝庫を開いた。彼はこれまでしばしば館の中で見事な宝物を与えられたことがあった。彼はミュルイング族の出であった。彼は大切な調停役であるエアルフヒルドのお供をして、まず最初に東方から、すなわち、オンイェルから（旅に出発し、）戦勝の誉れ高いが残忍な裏切り者エオルマンリーチ王の宮廷を訪れた。彼は多くのことを語り始めた。（一一九）

「私は国々を支配する数多くの人々について聞いて知っている。すべての王は、玉座を高揚したいのであれば、高潔に生き、国を治めなければならない。これらの王の中でフワーラはしばらくの間最も優れた王であった。アレクサンドレーアスはすべての部族の人の中で最高の力を持ち、私がこの世で聞き及んだ人々の中では最も華々しい成功を収めた。エトラはフーン族、エオルマンリーチはゴト族、ベッカはバーニング族を治め、ブルイェンド族はイヴィカが治めた。カーゼルはクレーアク族、ケリチはフィン族、ハイェンはホルムリュッジ族を治め、ヘオデンはグロンム族を治めた。ウィッタはスウェーフ族、ワダはヘルシング族、メアカはミュルイング族、メアルクヘアルフはフンディング族をそれぞれ治めた。セーオドリーチはフロンク族、シュレはロンディング族、ブレオカはブロンディング族、ビルリングはウェルン族をそれぞれ治めた。オースウィネはエーオウ族を治め、そしてユート族はイェフウルフが治め、フォルクワルドの息子のフィンはフレーズン族を治めた。シイェヘレはかなり長い間セーデネ族を治め、フネフはホーチング族、ヘルムはウルフィング族、ワルドはウォーイング族、ウォードはシューリング族、セーフェルスは

シュッジ族を治め、スウェーオム族はオンイェンドセーオウが、シェアフトヘレはユンブル族、シェーアバはロンゴベアルド族、フーンはヘトウェレ族、そしてホレンはウロズン族をそれぞれ治めた。ヘレファレン族の王はフリングウェアルドと呼ばれた。オッファはオンイェル族、アレウィーヒはデネ族を治めた。アレウィーヒはこれらすべての勇者の中で最も勇敢だったが、それでもオッファより優れた武勲を立てることはなかった。それというのも、オッファはまだ幼い時に人々の中では最初に最大の王国を手に入れたからである。彼と同じ世代の者で彼より大きな手柄を立てた者はいなかった。彼は自分の剣一本でフィーヴェルドルにおいてミュルイング族との国境を定めた。その後、エンイェル族とスウェーフ族はオッファが手に入れた領地を長く守った。甥と叔父の間柄であったフロースウルフとフロースガールは、ウィーチング族を追いやり、インイェルドの軍勢を敗走させ、ヘオロットでヘアゾベアルド族の軍隊を滅ぼした後、かなり長い間平和を保った。[二]」（一〇一四九）

「話を元に戻そう。私は広大な地上の多くの異国を旅して回った。そして、私は肉親と別れ、血族と遠く離れ、それらの国々で、良くも悪くも、さまざまな経験をし、あちこちで仕えた。それゆえ、私は唄ったり、物語を語ることができ、広間の群衆の前で高貴な人々が私を気前よくもてなしてくれた様子を話すことができる。私はフーン族とフレースゴト族、スウェーオム族とイェーアト族と南デネ族のところにいた。私はウェンル族とウィーチング族のところにいた。私はイェフス族とウィネド族とイェッフレーイ族のところにいた。私はエンイェル族とスウェーフ族とエーネーン族のところにいた。私はセアクス族とシュッジ族とスウェオルドウェル族のところにいた。私はフロン族とデーアン族とヘアゾレーアム族のところにいた。私はシューリング族とスローウェンド族とブルウェンド族のところにいて、そこで宝環を授けられた。すなわち、ブルイェンド族のグースヘレは歌の褒美として私に輝く宝石を与えてくれ

た。彼は決していい加減な王ではなかった。私はフロンク族とフリュース族とフルムティング族のところにいた。私はルーグ族とグロンム族とルームワル族のところにいた。同様に、私はエルフウィネと共にエアトゥレにいた。私が聞いた話では、このエーアドウィネの息子は、人々の間で名誉を得るのに最も素早い手、指輪や輝く宝環を与えるのに最も気前のよい心を持っていた。私はセルチング族とセーリング族のところにいた。私はクレーアク族とフィン族とカーゼルのところにいた。彼は城と富と娯楽の対象、およびワール族の王国の支配権を握っていた。私はスコット族とペオホト族とシュリデフィン族のところにいた。私はリドウィーチング族とレーオン族とロングベアルド族、ヘーゼン族とヘレス族、およびフンディング族のところにいた。私はイスラーヘールム族とエクスシュリング族、エブレーウム族とインデーウ族とエユプト族のところにいた。私はモイド族とペルス族とミュルイング族、およびモフディング族とアモティング族、およびエーアストシューリング族のところにいた。私はオーフディング族とエオル族とイースト族とイドゥミング族のところにいた。さらに、私は長い間エオルマンリーチのところにいたが、その間、ゴト族の王は私を気前よくもてなしてくれた。都の住民たちの統治者である王は私に腕輪を与えてくれた。その中にはシリングで勘定して六〇〇枚分の純金が含まれていた。[1] 故郷に戻った時、私はそれを大切な人への贈り物として自分の守護者であるエーアドイルスに差し出した。それというのも、ミュルイング族の王である彼は土地を、すなわち、父の領地を私に与えてくれたからである。一方、エーアドウィネの娘であり威厳のある高貴な女王エアルフヒルドも私に他の腕輪を与えてくれた。黄金で飾られたこのお方は贈り物を与えてくださる空の下で最高の王妃であると私が歌で吟じる時、彼女への称賛の声は多くの国々に広まった。シルリングと私が二人の勝利の主君の前で澄んだ声で吟詠し、竪琴に合わせて曲を高々と奏でた時、知識が豊富で勇気あふれる多くの人々はこれほど優れた歌を今まで聞いたこと

がないと口に出して言った。」（五〇－一〇八）

「それから、私はゴト族の国をくまなく回り、最高の知己の元を訪れた――それはエオルマンリーチの王家であった。ヘーヒカとベアデカとヘレリング族を私は訪れた。エメルカとフリドゥラとエーアストゴタ、（および）賢明で勇敢なウンウェーンの父を私は訪れた。セッカとベッカ、セアボラとセーオドリーチ、ヘアゾリーチとシヴェカ、フリーゼとインジェンセーオウを私は訪れた。エーアドウィネとエルザ、エイェルムンドとフンガール、およびウィスミュルイング族の誇り高い部族を私は訪れた。ウルフヘレとウィルムヘレを私は訪れたが、そこでは、フレード族の軍隊が強い剣によってウィーストラの森の辺りで自分たちの古くからの都をエトラの人々から守らねばならなかったため、戦はなかなか止まなかった。私はレードヘレとロンドヘレ、ルームスターンとイースヘレ、ウィゼルイエルドとフレオゼリーチ、ウドゥガとハーマを私は訪れた。彼らの名前を挙げるのが最後になったとはいえ、彼らが友人として劣っていたというわけでは決してない。その軍隊から憎い敵の中へうなる槍がひゅーという高い音を立ててひんぱんに投げ込まれた。ウドゥガとハーマは流浪の身でありながら、ひねった金の飾りを与え、その地で男と女を支配していた。」（一〇九－一三〇）

「私がこのように旅をしながらいつも気づいたことは、この世に生きている間に神に許されて人々の国を支配する者は住民たちにとても慕われているということである。」（一三一－一三四）

このように、人々の吟遊詩人たちは運命に従い、放浪しながら多くの国々を巡り、要望されたことを語り、感謝の言葉を述べ、南であれ北であれ、分別に富み贈り物に気前のよい人にいつも出会う。そういう人は光と命が共に消え去るまで、人々の前で名誉を高め、武勇を発揮することを願う。また、そういう人は名誉を得て、天の下で永遠の栄

光を手にするのである。（一三五―一四三）

## 訳注

### フィンズブルグの戦い

（一）歩哨の言葉の末尾と考えられる。

（二）デネ族の王フネフとする見方が有力である（Gordon 1954:63）。

（三）狼のこと。鎖帷子と解釈することもできる。

（四）槍のケンニングのひとつ。

（五）客であるデネ族に対してフィンが裏切りの攻撃をしかけようとしていること。

（六）フィンの軍勢のこと。

（七）ゲルマンの一部族。この部族はデネ族と同盟関係にあることがはっきりと分かる。

（八）館の中のデネ族のグースラーフと同性で、多分、二人は血族なのであろう。そうなると、ここには親子の悲劇的な対立の構図が含まれていることになる（Gordon 1954:63）。

（九）フィンの家臣の一人。

（一〇）　フィンのこと。

**ワルデレ**

（一）　ヒルデュースを指すと考えられる。

（二）　ワルデレを指すと考えられる。

（三）　ワルデレは彼の人質ではあったが、彼の武将の一人となっていた。

（四）　『ニーベルンゲンの歌』ではワルターはグンターに宝物を差し出して和睦しようとするが、拒否され、攻撃が開始される。この詩のこの場面は攻撃開始の直前の部分と思われる。

**『ケドモンの賛歌』**

（一）　古英詩には「人間の子供たち」という表現がよく用いられている。

**十字架の夢**

（一）　いくつかの古英詩はHwætで始まる。これは読者ないしは聴者の注意を喚起するためのものと考えられる。日本語では「さて」が妥当な表現であろう。

（二）　キリストと十字架のこと。

（三）　『マタイによる福音書』（第二七章五七節）には、「夕方になると、…ヨセフという人が来た。」とある。

（四）　三本の十字架を指す。

（五）　十字架発見をテーマにした古英詩『ヘレナ』を参照。

（六）　この詩の作者のこと。

（七）　人間のこと。

（八）　十字架を指す。

（九）　キリストの黄泉降下（harrowing of hell）をいう。

**脚韻詩**

（一）　諸説紛々であるが、ここでは「船」から帰納して「動く物体」と解しておく（Muir 1994:546）。

（二）　前後の脈絡から判断すると「私」を指していると考えられる。

**ウィードシース**

（一）　デネ族のフロースガールとフローズルフの間の不和、およびデネ族とインイェルドが属するヘアゾベアルド族の不和は『ベーオウルフ』二〇二〇－二〇六九行）。

（二）　古英語のsceattが'money, treasure'という一般的な意味か、それとも'piece of money, coin'という特殊な意味を表すのかはっきりしないため、この辺りの正確な解釈は不可能。

（三）　古英詩には「ひねった金の飾り物」という表現が多く用いられている。

**固有名詞注解**

アモティング族　Amothing　ノルウェー最大の島Hindøの住民（Malone 1962:128-9）。

アレウィーヒ　Alewīh　デネ族の王ということ以外は不詳であるが、『アングロサクソン年代記』の中のマーシャの王の系図の中にAlweoという名がある（Sedgefield 1928:134）。

アレクサンドレーアス　Alexandrēas　マケドニア王アレクサンダー大王（Alexander 356-323BC）のこと。綴り字はAndreasとの混同によるものであろう（Sedgefield 1928:132; Malone 1962:128）。

イヴィカ　Gifica　ブルグンド王国を建てたと言われる伝説上の人物。歴史上は知られていないが、この部族が西に移住する以前にGifica 'giver'というあだ名を持つ王がいて、君臨していたのかも知れない（Malone 1962:154）。

イェーアト　Gēat　古英語の王家の名Gēat(a)、またはスカンジナヴィアのバラッドに出てくるGauteまたはGautiと同一とみなされている（Malone 1977:40）。

イェーアト族　Gēat　ベーオウルフが属していたゲルマンの一部族のことで、スウェーデン南部に住んでいた。

イェッフレーイ族　Geffleg　タキトゥスの『ゲルマーニア』（四〇節）のアウィオネス族（Aviones）のこと。

イェフウルフ　Gefwulf　ユート族の王であること以外は不詳。Gef-はg(i)efan 'give'に由来すると考えるのが最もよい（Malone 1962:153）。

イェフス族　Gefþ　東ゲルマンの一部族で、元来、ヴィスラ川（カルパチア山脈に発し、バルト海に注ぐポーランドの川）の近くに住んでいた（Malone 1962:153）。『ベーオウルフ』（二四九四行）ではイフス（Gifþ）と呼ばれている。

イースト族　Īst　バルト海の沿岸に住んでいた東ゴート族。

イースヘレ　Gīshere　ブルグンド族の王Gislaharius のこと。

イスラーヘルム族　Israhelm　聖書に登場するイスラエル王国の住民のこと。

イドゥミング族　Iduming　現在のリヴォニア（バルト海東岸に面した地方名）に住んでいた小部族。

インイェルド　Ingeld　ヘアゾベアルド族の王で、六世紀初頭に活躍した歴史上の人物であったらしい。『ベーオウルフ』ではフ

ローダの息子と呼ばれている（Malone 1962:179）。

インジェンセーオウ　Incgenbēow　スウェーデン王で、『ベーオウルフ』に登場するオンイェンドセーオウの異形と言われている（Malone 1962:179）。

インデーウ族　Indēu　インドの住民。nをuと校訂し、Iudeu「ユダヤ人」とみなす説もある（Malone 1962:179）。

ウィスミュルイング族　Wīsmyrging　オンイェンドミュルインガスとして知られている部族の一般的な呼び名。

ウィーストラの森　Wistla wudu　ゴート族は元来ヴィスラ川（Vistula）の下流域に住んでいた。

ウィゼルイエルド　Wibergield　ヘアゾベアルド族の兵士。『ベーオウルフ』ではウィゼルユルドとして出てくる。

ウィーチング族　Wicing　ヘアゾベアルド族の別称であり、後にスカンジナヴィアの略奪者たちに適用されるようになったwicingと同じ意味では用いられてはいない。

ウィッタ　Witta　スウェーフ族の王。ベーダの『英国民教会史』によると、彼はジュート族を率いてブリテン島へ移住した兄弟ヘンイェスト（Hengest）とホルザ（Horsa）の祖父に当たる（Sedgefield 1928:132; Malone 1962:210-11）。

ウィディア　Widia　ゴート族の武将。

ウィードシース　Widsiðā　同名の詩の語り手。作者の創作であろう。古英語のwidsiðāは'long journey, far-traveller'の意。

ウィネド族　Wined　ゲルマン人がスラブ族を指すのに用いた呼び名。タキトゥスの『ゲルマーニア』（四六節）のウェネディ（Venedi）族のこと。

ウィルムヘレ　Wyrmhere　サガに登場するOrmarrと同一人物で、ウルフヘレの兄か弟。

ウェーランド　Wēland　ゲルマンの伝説に名を残す高名な刀工、武具師。ウェールンドとも呼ばれている。

ウェルン族　Wern　タキトゥスの『ゲルマーニア』（四〇節）で言及されているワリニ族（Varini）のことで、アングル族の近くに住み、川と森に守られた地域に住むと記されている。Warnham, Warnborough などの英国の地名はこの部族に関係があるのかも知れない（Sedgefield 1928:133; Malone 1962:207-8）。

ウェンル族　Wenl　『ベーオウルフ』に出てくるWendle族と同一。スウェーデンないしは北ユトランドの住民のヴァンダル族のことか（Malone 1962:209）。

ウォーイング族　Wōing　詳細は不明。Malone(1962:211-2)はオスロ湾の西側にいた部族説を提案している。

ウォード　Wōd　シューリング族の王であること以外は不明。古英語のwōdは‘furious, mad, with rage’を表すことから、この王の戦の仕方を示すあだ名かも知れない（Malone 1962:211）。

ウドゥガ　Wudga　エオルマンリーチやセーオドリーチより以前に活躍したゴート族の英雄。『ワルデレ』では、セーオドリーチを助けたことにより褒美を与えられたと記されている。

ウルフィング族　Wulfing　『ウィードシース』に出てくる部族名。ノルウェーの伝説上のYlfingarか『ベーオウルフ』（四六一、四七一行）で言及されているWilfingsまたはWylfingsと同一部族らしいが、居住地については確実なことは分かっていない（Malone 1962:213）。

ウルフヘレ　Wulfhere　フン族と共に戦をした時に軍隊を率いたフレデ族の二人の王子の一人（Malone 1962:213）。

ウロズン族　Wrosn　デンマークの島々にいた部族で、アングル族と共にブリテン島に移住したとみなされている（Malone 1962:212）。

ウンウェーン　Ūnwēn　エーアストゴタの息子で、ゴート族の王子。この名は‘the unexpected one’を意味することから、エー

アストゴタの晩年に思いがけず生まれた子であろうと推測できる（Malone 1962:206）。

エアトゥレ　Eatule　イタリアのこと。当時の英語の正当な綴り字を表記するとこうなる。

エアルフヒルド　Ealhhild　エーアドウィネの娘、エオルマンリーチの妃。ただし、彼女はウィードシースの主君エーアドイルスの妃であったという説と王女であったという説に分かれている。後者の場合、彼女は東ゴート族の王エオルマンリーチと結婚するためにウィードシースを伴って旅に出たことになる。もっとも、この作品の登場人物については史実に基づく考証が有効であるとは限らない（Malone 1962:140-2）。

エーアストゴタ　Ēastgota　ゲルマンの伝説上高名な東ゴート族の王で、エオルマンリーチの先祖の一人。したがって、ここで登場するのは場違い。

エーアストシューリング族　Ēastbȳring　歴史上のThuringians、古代のHermunduriのこと。Ēastは'east'、すなわち、「東の」の意で、エルベ川の東に定住した部族を表すか、それともオランダのThoringi族と区別するためのいずれか（Malone 1962:143）。

エーアドイルス　Ēadgils『ウィードシース』に登場する人物。ミュルイング族の王ということ以外は知られていない。『ベーオウルフ』に登場するエーアドイルスとは異なる。

エーアドウィネ　Ēadwine　ロンバルド族の王Audoinのことで、治世は五四六―五六五年頃（Malone 1962:139）。

エーアハ　Ēaha　デネ族の兵士。

エイェルムンド　Ǽgelmund　ランゴバルド族の伝説によれば、彼はこの部族の初代の王であった（Malone 1962:126）。

エオル族　Eol　ヴィスラ川下流域にいたゲルマンの一部族で、タキトゥスの『ゲルマーニア』（四三節）のヘルウェコネス

(Helvecones) 族のこと (Malone 1962:179)。

エーオウ族　Ēow　この部族はエーアウ族（Ēaw）と同一で、タキトゥスの『ゲルマーニア』（四〇節）のアングル族の直前に名前をあげられているアウィオネス族（Aviones）とみなす学者もいる（Sedgefield 1928:133）。しかし、この部族をバルト海のスウェーデン領のエーランド島（Öland）の名と結びつける説が最も有力（Malone 1962:149）。

エオルマンリーチ　Eormanric　一般にエルマナリヒ、エルマナリック（Erman(a)ric）と呼ばれているゲルマンの英雄伝説で名高い東ゴート族の偉大な王。フン族の攻撃から王国を守りきれないと知って自殺したとも伝えられている（三七五年頃没）。『ウィードシース』の詩人は彼を「残忍な裏切り者」と評しているが、詩人はいかなる為政者の悪口も語っていないことから、この部分は、彼がエアルフヒルドを殺したことなどの伝説に基づく後世の挿入であろうと言われている（Malone 1962:32-5, 146-9)。

エクスシュリング族　Exsyring　アッシリア人ということで学者の意見は一致している。

エトラ　Ætla　五世紀中頃に活躍したフン族の王アッチラ（Attila）のこと。

エブレーウム族　Ebrēum　いわゆるヘブライ人のこと。

エメルカ　Emerca　フリドゥラと共にエオルマンリーチの甥で、二人は兄弟であったと考えられている（Malone 1962:145-6)。

エーネーン族　Ænēn　不詳。ただし、ユトランド半島に居住していた可能性がある（Malone 1962:127-8)。

エユプト族　Egypt　エジプト人。

エルザ　Elsa　東ゴート族の王セーオドリーチの物語に出てくるランゴバルド族の王または英雄のことであろうと言われている (Sedgefield 1928:137-8; Malone 1962:143-4)。

エルフウィネ　Ælfwine　五六八年にイタリアに侵入し、この国を征服したロンバルド族の偉大な王Alboinのこと。五七三年に妻の指示で暗殺された（Malone 1962:126-7）。

エルフヘレ　Ælfhere　ワルデレの父。

エンイェル族　Engel　アングル族（Angle）のこと。

オースウィネ　Ōswine　エーオウ族の王であること以外は不詳。

オーフディング族　Ōfding　東ゴート族の王家に属する部族名と思われる（Malone 1962:186-7）。

オッファ　Offa　四世紀の後半に活躍したオンイェル族の王。

オルドラーフ　Ordlāf　デネ族の兵士。『ベーオウルフ』（二一四八行）のオースラーフ（Ōslāf）と同一人物であろうと言われている。

オンイェル　Ongel　バルト海に面するユトランド半島の一地域で、現在のSleswick東部のAngelnのこと。アングル族発祥の地とも言われ、五―六世紀にブリタニアに移住する以前の英国人の故郷（Malone 1962:187-8）。

オンイェンドセーオウ　Ongendþēow　『ベーオウルフ』のオンイェンセーオウ（Ongenþēow）と同一人物。五世紀の後半から六世紀初頭にかけて活躍したらしい（Malone 1962:189-90）。

カーゼル　Cāser　ローマ皇帝ジュリアス・シーザー（100-44BC）のこと。

ガールルフ　Gārruf　フリジア族の兵士。グースラーフの息子。多分、フリジア族のグースヘレの叔父か甥。

グースヘレ　Gūð(h)ere　フリジア族の兵士。『フィンズブルグの戦い』に登場する人物。

グースヘレ　Gūðere　ブルグンド族の高名な王Gundaharius（またはGunnar, Guntherとも呼ばれている）のこと。四三七年、

彼は自分の軍隊もろともフン族に滅ぼされた。この戦闘はゲルマンの最も有名な伝説『ニーベルンゲンの歌』のテーマのひとつになっている。『ワルデレ』と『ウィードシス』で言及されている人物。

グースラーフ　Gūþlāf　デネ族の兵士。『ベーオウルフ』（一一四八行）のグースラーフと同一人物と言われている。

クレーアク族　Crēac　ギリシャ人、すなわち、東ローマ帝国の住民のこと。

グロンム族　Glomm　タキトゥスの『ゲルマーニア』（四三節）のレモウィイ（Lemovii）族と同一視する説が有力（Malone 1962:155-6）。ただし、この部族とノルウェーの川の名Glommenを結びつける説もある（Sedgefield 1928: 132）。

ケリチ　Cælic　フィン族の王。この名前は一一世紀の英国ではCalicという形で生じる。フィンランドの英雄叙事詩『カレワラ』（*Kalevala*）の英雄の父Kalewの崩れた形と解釈する説が有力である（Malone 1962:134）。

ゴト族　Got　ゴート族、より正確に言うと、エオルマンリーチに支配されていた東ゴート族。

シイェフェルス　Sigeferð　セッジ族の兵士。

シイェヘレ　Sigehere　セーデネ族の王で、*Snorra Edda*などのスカンジナヴィアの伝説で著名な英雄Sigarrのこと。

シヴェカ　Sifeca　中高ドイツ語の伝説に登場する不忠で裏切り者のSibichのこと。彼の企みにより、エオルマンリーチは息子たちを殺してしまう。

シェアフトヘレ　Sceafthere　ユンブル族の王ということ以外は不詳。この名は‘spear-army>protector’であることから、王の呼称であることは確実である（Malone 1962:194）。

シェーアバ　Sceāfa　ウェストサクソン族の初代の王シェーアフSceāfと同一人物であろうと言われている。『ベーオウルフ』では、Scyldはシェーフの子（Sceāfing<Sceāf）と呼ばれている。

シュッジ族　Sycg　『ウィードシース』に出てくる部族の名。『フィンズブルグの戦い』（二四行）のSecgと同一であるが、詳しいことは知られていない。

シューリング族　þýring　アルフレッド王がOrosiusで言及しているThuringian（現代ドイツのチューリンゲン）ないしはフランク族の一派のThoringiとみなす説があるが（Sedgefield 1928:134）、その他の説もあるMalone(1962:205-6)。

シュリデフィン族　Scridefinn　ヨーロッパの最北端に住んでいた原始部族で、現在のラップランド人の先祖と考えられる（Sedgefield 1928:136）。

シュレ　þyle　ロンディング族の王。古英語のþyle'orator, court wit'から作られた名前、ないしはセオドリーチの忠実な相談役を表すという説がある（Sedgefield 1928:133）。

シルリング　Scilling　ウィードシースと組になって唄ったと思われる吟遊詩人。二人で一緒に旅して回っていた可能性もある。一方、楽器の名前という説もある。

スウェオルドウェル族　Sweordwer　詩人の造語であろうという説（Sedgefield 1928:135）と、タキトゥスの『ゲルマーニア』（四〇節）で言及されているスアルドネス族（Suardones）説がある（Malone 1962:202-4）。

スウェーオム族　Sweōm　南スウェーデンに住んでいた部族で、『ベーオウルフ』ではSwēonという名で登場する。

スウェーフ族　Swæf　現在のドイツのスワビア人（Swabian）の祖先に当たる部族で、バルト海沿岸からドイツの南端に至る広大な地域に住んでいた（Malone 1962:201）。

スコット族　Scott　ベーダによると、アイルランドからやってきて、カレドニアに定住した部族（Sedgefield 1928:136）。

スローウェンド族　Prōwend　ノルウェーのTrondelagen地方の住民であるProndrのこと（Malone 1962:205）。

セアクス族　Seax　いわゆるサクソン族のこと。この部族は元来、現在の西ホルシュタイン地方の一部を占拠していたが、後にエルベ川を渡り、現在のオランダの沿岸のフリジア人たちの領土にまで定住した（Malone 1962:195-6）。

セアボラ　Seafora　セーオドリーチの家臣で、不忠の悪評が高い（Malone 1962:194-5）。

セーオドリーチ　Þēodric　彼はClovisの長男で、フランク族の王であった（在位五一一―三四）Theodricのこと。息子のTheodebertは、ベーオウルフが仕えていたヒイェラーク王を倒したことで知られている。『デーオル』に登場する。

セーオドリーチ　Þēodric　ヴェロナ（Verona）のセオドリック（Theodric）のこと。『ワルデレ』に登場する。

セッカ　Secca　同名の父の息子Sigiwaldのこと。二人はフランク族の王セーオドリーチの血族であった（Malone 1962:196）。

セッジ族　Secg　シュッジ族と同じ。

セーデネ族　Sǣdene　スウェーデン南岸を原住地としたデネ族に対して、島々に住んだデネ族を指すのであろう（Sedgefield 1928:133）。

セーフェルス　Sǣferð　『ウィードシース』に出てくるシュッジ族の王。『フィンズブルグの戦い』に登場するシイェフェルス（Sigeferð）と同一とみなす説があるが、これには異論もある（Malone 1962:193）。

セーリング族　Sēring　セルチング族の別名か、それともシリア人（Syrians）かはっきりしない（Malone 1962:198-9）。

セルチング族　Sercing　サラセン人ないしは東アジアのある国の住人を指しているものと思われる（Sedgefield 1928:136）。ただし、Malone(1962:197-8)はタキトゥスの『年代記』で言及されている黒海沿岸の住民シラチ（Siraci）とみなす。

デーアン族　Dēan　不詳。ただし、デネ族とは異なる。

デーオル　Dēor　吟遊詩人であるが、この名は古英詩の中では『デーオル』だけに登場することから、作者の創造した人物であろ

うと考えられている。この語に対応する古英語の形容詞は'brave, bold, severe, grievous'などを表す。

デネ族　Dene　スウェーデンの南岸地域に住んでいたゲルマンの一部族で、六世紀のローマとギリシャの作家によって初めて言及された。この頃までにいくつかの下位の部族に分裂していたらしい（Malone 1962:136）。

ニースハード　Niðhād　『デーオル』に登場する。ゲルマンのどの部族に属していたのかは不明であるが、該当する人物はいたらしい（Malone 1977:41）。

ニースハード　Niðhād　ウィディアの祖父。『ワルデル』に登場する。

ハイェン　Hagen　ルギアン族の王で、Hild Sagaとして知られている有名な物語の主要登場人物の一人（Malone 1962:159）。

ハイェン　Hagen　フランク族の兵士。『ワルデレ』に登場する。ハガノ、ハーゲンとも呼ばれる。

バーニング族　Bāning　不詳。ただし、BainaibやBohemiaなどの地名に関連ある部族とも言われている（Malone 1962:129-30）。

ハーマ　Hāma　ブロージング族の首飾りを盗んだゴート族の伝説上の人物。

ヒルデイース　Hildegȳð　ブルグンド族の王女。ヒルトグント（Hiltgunt）とも言う。

ビルリング　Billing　ウェルン族の王。この名は初期のサクソン王朝の名や英国の地名や人名（Billingsgate, Billingham, Billingtonなど）に見られるが、具体的にだれかと結びつけるとなると問題が残る（Malone 1962:132-3）。

フィーヴェルドル　Fīfeldor　ホルシュタインとシュレスヴィヒの間を流れるアイデル川（Eider）の河口のこと。

フィン　Fin(n)　東フリジア族の王。フィルデブルフの夫。フォルクワルドの息子。アングロサクソン伝説上傑出した人物。『ベーオウルフ』と『フィンズブルグの戦い』に登場する。

フィン族　Finn　現在のフィンランドと北ロシアの住人であるフィン人の先祖。ただし、これには異説がある（Malone 1962:150）。

フォルクワルド　Folcwald　フィンの父の名。正式の名はGodwulfであったらしい（Malone 1962:150）。

フネフ　Hnæf　デネ族の王。『ベーオウルフ』、『フィンズブルグの戦い』、『ウィードシース』の三編の詩に登場する。ホークの息子であり、フィンの妻ヒルデブルフの弟。

フリーゼ　Hlīþe　北欧の伝説『サガ』の一つ*Hervararsaga*に登場するHlǫðであろうと言われているが、イェーアト族の王フレーゼル（Hrepel）という説などもある（Malone 1962:170-2）。

フリュース族　Frȳs　フリジア族のこと。フレーズン族と同一。彼らはフランク族と共にヒイェラーク王を倒した。

フリドゥラ　Fridla　エオルマンリーチの甥で、エメルカとは兄弟。

フリングウェアルド　Hringweald　ヘレファレン族の王であること以外は不詳であるが、'ring-ruler'という名は王の呼称としてふさわしいと言われている（Malone 1962:175）。

ブルイェンド族　Burgend　ゲルマンの一部族で、一般にブルグンド族と言われている。原住地のスカンジナヴィアから南下し、五世紀初頭にはライン川西岸近くまで進出していた。フン族によって潰滅に追い込まれた悲劇は『ニーベルンゲンの歌』の題材となっている。

フルムティング族　Frumting　五世紀のスペインのスウェーヴィ族の一派で、フラムタ（Framta）王の家臣たちのこと（Malone 1962:152）。

ブレオカ　Breoca　ブロンディング族の王。ベーオウルフと泳力を競ったブレカ（Breca）と同一人物で、ベーアンスターンの息子。

フレオゼリーチ　Freoperic　エオルマンリーチの息子で、中高ドイツ語の物語に出てくるフリードリヒのことと言われているが、詳細は不明。

フレースゴト族　Hrēðgot　東ゴート族の詩的別称。古英語のhrēðは'victory, glory'の意味で、Hrēðic, Hrēðannaなど、固有名詞の第一要素にも同形のものが用いられていることから、両者の関連が考えられる。

フレーズン族　Frēsn　オランダの沿岸およびフリースランド諸島に住んでいたフリジア族のこと。

フレード族　Hræd　ゴート族の別称で、'nest-Goths'の短縮形（Malone 1962:174）。

フローズウルフ　Hrōþwulf　六世紀の前半に活躍したデネ族の王。『ベーオウルフ』ではフローズルフと呼ばれている。フローズガールの弟ハールガの息子。

フローズガール　Hrōðār　デネ族の王。

フロン族　Hron　不詳。ただし、Malone(1962:175-6)を参照。

ブロンディング族　Bronding　『ベーオウルフ』ではこの部族はヘアゾレーアム族の近くに住むとされているが、そのような名前は史書にはなく、不詳（Malone 1962:133-4）。BrecaもBrondingも「海」を表す造語とみなす学者がいる（Sedgefield 1928:133）。

フロンク族　Fronc　一世紀以降ライン川流域に住んだゲルマン人のフランク族のこと。それ以前の呼び名はフーグ族（Hug）であったらしい。

フワーラ　Hwāla　『アングロサクソン年代記』の八五五年の項のウェストサクソン諸王の記述の中に、シェーアフ（Sceaf）の孫としてフワーラの名が見える。ただし、この人物は詩人ないしは系図作成者の創作かも知れない（Sedgefield 1928:132;

Malone 1962:178)。

フーン　Hūn　ヘトウェレ族の王。多分、アイスランドの詩に登場する王Hunnのことであろうと言われている（Malone 1962:176)。

フーン族　Hūn　歴史に登場するいわゆるフン族のこと。

フンガール　Hungár　ランゴバルド族の二代目の王。

フンディング族　Hunding　ランゴバルド族の古い名で、'dog-son'の意。彼らはバルト海の南岸の東ホルシュタイン地域に住んでいたのであろうと考えられている（Sedgefield 1928:132; Malone 1962:176-7)。

ヘアゾベアルド族　Heaðbeard　ゲルマンの一部族。南へ移住した後も原住地に留まったロングベアルド族を指していると一般に考えられている（Sedgefield 1928:135; Malone 1962:162-5)。

ヘアゾリーチ　Heaboric　北欧の伝説HarvararsagaのHeiðekrと言われている（Malone 1962:165-8)。

ヘアゾレーアム族　Heaborēam　ノルウェー南部に住んでいた部族。ベーオウルフと水泳の技を競ったブレカはこの部族の領地の海岸に打ち上げられた。

ベアデカ　Beadeca　多分、東ゴート族の王（五四一―五二年）のBaduilaかTotilaであろうと言われている（Malone 1962:130)。

ベアドヒルド　Beadohild　ニースハードの娘。ウェールンドはニースハードに復讐するために、彼女の二人の兄弟を殺し、彼女を凌辱する。彼女はウェールンドの子を身ごもる。この子は後に英雄ウィディアとして名を馳せることになる。彼は『ワルデレ』のウィディア、『ウィードシース』のウドガと同一人物である。

ヘオデニング族　Heodening　グロンマ族と同一で、「ヘオデンの一族」の意。ヘオデンにつながる王家の一族。

ヘオデン　Heoden　南バルト海沿岸に住んでいたグロンム族の王。Gordon (1954:67) によると、彼はハイェンの娘ヒルドを連れ去った。

ペオホト族　Peoht　アイルランドとスコットランドの一部に住んでいたピクト族のこと。

ヘオルレンダ　Heorrenda　『デーオル』に出てくる吟遊詩人であるが、アイスランドの伝説にはHjarrandiという人物が登場するらしい (Malone 1977:40)。

ヘオロット　Heorot　デネ族の王フロースガールの巨大な館の名称。ここは『ベーオウルフ』の前半の最も重要な舞台となる。

ベッカ　Becca　バーニング族の王。北欧の伝説エッダとサガに登場する裏切り者のBikkiのことで、彼はエオルマンリーチがSwanhild (多分エアルフヒルドと同一人物) に求婚するために、息子とベッカを使者として送り出したが、ベッカは父子を裏切った (Gordon 1954:67)。しかし、この説には異論もある (Malone 1962:131-2)。

ベッカ　Becca　セーオドリーチの息子でフランク族の王Theodberhtのこと。本文ではセッカと併記されている。

ヘーゼン族　Hæðen　ノルウェーのヘデマルク (Hedemark) と呼ばれる地域に住んでいた部族。古英語のhæðen 'heathen' と関連づけようとする説もある (Malone 1962:159)。

ヘトウェレ族　Hætwere　ライン川の下流域に住んでいたフランク族の一派で、『ベーオウルフ』の中でヒイェラークとその部族であるイェーアト族と戦い、勝利を収めたヘトワレ族 (Hetware) のこと。

ヘーヒカ　Hēhca　エオルマンリーチの父。

ヘルシング族　Hælsing　バルト海の南岸地域に住んでいた部族のことであろうと言われている。現在のヘルシンキなどの地名の一部にその名を留めている (Malone 1962:158-9)。

ペルス族　Pers　ブリトン族の一派で、ハンバー川の河口に住んでいたパリシイ族のことか（Malone 1962:190-1）。

ヘルム　Helm　ウルフィング族の王。Helmは'protector'を表すことから、王の呼称であることは確かである。『ベーオウルフ』（六〇行）には、デネ族の王フロースガールの妃ウェアルフセーオウが属していた部族ヘルミング族がでてくるが、支配者名としては『ウィードシース』以外の作品には出てこない（Sedgefield 1928:133; Malone 1962:169）。

ヘレス族　Hærep『アングロサクソン年代記』（Laud MS）の七八七年の項にHereðaland「ヘレス族の国」というのがある（Sedgefield 1928:136）。Hælepと校訂すると、北ユトランド半島に住んでいたゲルマン人を指す（Malone 1962:157）。

ヘレファレン族　Herefaren　詩人の創作であろうと言われているが（Sedgefield 1928:134）、この語は'pirates'を意味することから、サクソン族を指すとみなす説もある（Malone 1962:169-70）。

ヘレリング族　Hereling　エオルマンリーチの甥のAkitとEgarðとと（Malone 1962:170）。

ヘンイェスト　Hengest　フネフ没後のデネ族の指導者。五世紀中頃、サクソン族を率いてブリテン島に侵入した武将と同一人物であろうと言われている。

ホーチング族　Hōcing　ホークの属する部族で、ヘアルフデネ族と同一。

ホルムリュッジ族　Holmrycg　南ノルウェーないしはバルト海沿岸に住んでいたスカンジナヴィア人の一派で、ルギアン族と同一（Malone 1962:173-4）。

ホレン　Holen　ウロズン族の王であること以外は不詳。しかし、古英語のholenは'protector, ruler, prince'のことであるため、王名であることは確かなようである（Malone 1962:173）。

南デネ族　Sūþdene　このように部族名に東西南北の区別がつけられることが少なくない。実質的な意味はなく、頭韻やリズムを

まかなうためであると言われるが、デネ族の分裂後の名称を反映しているとの説もある（Malone 1962:136）。

ミムミング　Mimming　ウェーランドによって鍛えられたと伝えられる剣の銘。

ミュルイング族　Myrging　ウィードシースが属していた部族。この部族は北海に注ぐアイデル川（Eider）の南側とエルベ川の間にいたサクソン族であっただろうと言われている（Sedgefield 1928:132; Gordon 1954:67; Malone 1962:183-4）。

メアカ　Meaca　ミュルイング族の王ということ以外は知られていない。

メアルクヘアルフ　Mearchealf　フンディング族の王ということ以外は知られていない。

メースヒルド　Mæðhild　スカンジナヴィアのバラッドに登場するMagnhildと同一人物（Malone 1977:41）。

メーリング族　Mæring　文字どおりには「辺境の住人」であるが、四世紀にローマに侵入した西ゴート族（Visigoth）のこと。

モイド族　Moid　デンマーク諸島の島MΦnの住民のこと（Malone 1962:183）。

モフディング族　Mofding　ユダヤ人と関係のある古代セム人のモアブ族（Moabites）のことか。Ofdingと校訂する学者もいる（Malone 1962:186-7）。

ユート族　Ýt　ベーダの『英国民教会史』によると、この部族は現在のユトランド半島に住んでいて、英国のワイト島やケント地方などに定住したジュート族（JuteまたはEut）のこと。

ユンブル族　Ymbr　キール湾（Kiel Bay）の東、Laalandの南に住んでいた部族らしい。

リドウィーチング　Lidwicing　現在のブリトン人の祖先で、『アングロサクソン年代記』の八八五年の項に言及されているLidwicのことで、アルモリカに定住した。Lidingと校訂する学者は「オスロ付近に定住したノルウェー人」とみなす（Malone 1962:180-1）。

ルーグ族　Rūg　五世紀中頃までにオーストリアまで南下したゲルマン人のホルムリュッジ族のこと（Malone 1962:192）。

ルームスターン　Rūmstān　エオルマンリーチの家臣の一人。中高ドイツ語のサガ伝説の中にRimsteinという英雄がいて、この人物と同一と考えられている（Malone 1962:192）。

ルームワール族　Rūmwāl　東ローマ帝国の住民、すなわちギリシャ人のこと。

レーオン族　Lēon　スウェーデンの東部に住んでいた部族。

レードヘレ　Rǣdhere　王か英雄であったと考えられるが、詳細は知られていない（Malone 1962:191）。

ロングベアルド族　Longbeard　エルベ川の下流域に住んでいたLongobardsまたはLombardsとして知られている部族で、タキトゥスは『ゲルマーニア』（四〇節）において、「たいへん多くの強力な部族に取り囲まれていながら、屈服ではなく戦いと危険を冒して身を守っている」気高い部族と称えている。

ロンディング族　Ronding　ノルウェーのTelemarkの住民。

ロンドヘレ　Rondohere　王か英雄であったと考えられるが、詳細は知られていない（Malone 1962:191）。

ワダ　Wada　ヘルシング族の王。ゲルマンの伝説上の刀鍛冶師ウェーランド（Wēland）の父とみなす説もある。ワダは海を支配する力と絶大な腕力の持ち主で、ヘオデンがヒルドを連れ去るのを助けたと言われている（Gordon 1954:68）。

ワール族　Wāl　ルームワル族か、それともゴール族（Gauls）のいずれか。

ワルデレ　Waldere　アキテーヌの英雄、後に王となった。ワルトハリウス、ワルターとも呼ばれている。

ワルド　Wald　ウォーイング族の王ということ以外は不詳。ちなみに、Waldは'ruler'を表すことから王族の呼称であることは明らかである。

藤原保明

# 解説

## 『フィンズブルグの戦い』 *The Fight at Finnsburg*

一七〇五年、英国の聖職者で学者であったGeorge Hickes (1642-1715) はランベス宮殿の図書室で古英詩のリーフを一枚発見し、みずからこの写本を転写した。その後、この写本は消失してしまったが、ヒッケスの筆写したものは残り、これは現存するこの詩の唯一の典拠となっている。

この断片に書かれている物語の内容はかなり明瞭である。すなわち、デネ族の若い王フネフは六〇名の従者と共に姉（または妹）のヒルデブルフの嫁ぎ先であるフリジア人のフィン王を訪ねていた。ところが、双方でもめごとでもおこったのであろうか、デネ族はフィンの館を占拠する。デネ族の歩哨は夜明け前にフネフを起こし、外の明かりは一体何なのかと尋ねる。フネフは館への攻撃が開始されようとしているのだと答え、部下を起こす。彼らは所定の場所につき、五日間一人の犠牲者も出さずに館の門戸を守る。断片はここで終わっているが、『ベーオウルフ』の中の「フィンの挿話」（一〇七一―一一六〇a行）は、この戦闘のその後の経緯を明らかにしている。この断片から推し測れる詩人の語りの意図は、主君のこれまでの恩に報いるために兵士たちが勇敢に戦う英雄的な行為にすぎないが、「フィンの挿話」ではどちらかというと主人公ヘンイェストの悲劇的な弱点に焦点が当てられている。物語の展開は緩急自在であり、第一段落のゆったりとした詩人の語り口は第二、第三段落になって急に速度を速める。そして、

最終段落になると嵐が過ぎ去った後のように静かでゆったりとした語り口になっている。

現存のこの詩はウェストサクソン方言で書かれているが、ノーサンブリア方言形とケント方言形も混在している。これは転写の際に混入したものか、それともウェストサクソン方言そのものが元来いくつかの方言が混ざり合った状態であったのかのどちらかである。この詩は『ベーオウルフ』とほぼ同じ七二五年頃に出来上がり、一〇世紀頃に転写されたものが残ったと考えられる（Fry 1974:4-5）。今回の翻訳ではFry(1974)の校訂本を主として参照した。

『ワルデレ』 *Waldere*

一八六〇年、コペンハーゲンの王立図書館で古英詩の写本のリーフが二枚発見された。この古英詩は現存するものとしてはこれら二枚の断片に含まれているものがすべてであるが、本来は一〇〇〇行前後の長さのものであったと思われる。この詩は、英雄ワルデレと、グースヘレに率いられたブルグンド族の部隊との戦いを扱っている。この物語そのものは大陸ではよく知られていて、完本と呼べる状態で現存しているのは、一〇世紀のラテン語版の*Waltharius*、一三世紀の古ノルド語版の*þiðikssaga*、一三世紀のポーランド語版の*Chronicon Poloniae*の三つであるが、その他にも断片や改作版など、この物語にまつわる作品は数多く知られている。もっとも、古英詩の断片の典拠ははっきりしない。最も古いラテン語版の物語の概要は次のとおり。

アキテーヌのワルトハリウスとブルグンド族の王女ヒルトグントという二人の恋人は、フランク族の兵士ハガノと共にフン族の王アッチラの宮廷で人質となっていたが、ハガノは逃亡し、フランク族の新しい王グントハリウスに加勢する。二人の恋人たちも莫大な財宝を携えて逃亡するが、この財宝を狙ったグントハリウスとハガノの軍勢に追いつかれる。ワルトハリウスは宝環を差し出して和睦を申し出るが、拒否され、二人から攻撃される。二日におよぶ戦いで三人とも負傷し、和睦する。ワルトハリ

ウスとヒルトグントは郷里に戻って結婚する。ワルトハリウスは王となって三〇年間統治する。

古英詩『ワルデレ』の第一断片は名剣をふるって戦いを続行するようワルデレ（＝ワルトハリウス）を激励するヒルデイース（＝ヒルトグント）の言葉の一部である。第二断片は解釈が分かれているが、最初の語り手（一―一〇行）はハイェン（＝ハガノ）、二番目の語り手（一四―三一行）はワルデレとみなす説が有力である（Zettersten 1979:4-5）。

断片の写本が書かれた時期は一〇世紀後半か一一世紀前半にさかのぼる（Zettersten 1979:9）。写本の言語特徴は主として後期ウェストサクソン方言のものであるが、元来はアングリア方言で作成され、一〇〇〇年以降にウェストサクソン方言に転写されたのであろうと考えられている。

作品の評価としては、たとえばMalone(1967:94-5)のように、この詩は『ベーオウルフ』の偉大さは備えていないとする批判もあるが、ほぼ完全な形で残っている三一八二行もの長編の『ベーオウルフ』と、合計しても六三行にすぎない断片を比較するのは当を得ていない。この翻訳はZettersten(1979)の刊本に基づくところが多い。

**『ケドモンの賛歌』** *Cædmon's Hymn*

英国の歴史家・神学者のベーダ（673-735）がラテン語で書いた『英国民教会史』（第四章第二四節）の中に、無学な農場労務者であったケドモン（Cædmon）という男が夢の中で神から作詩の才能を授けられ、宗教詩を作り始めたという話が出ている。ケドモンは六五七―六八〇年頃に活発な作詩活動をしていたものと考えられているが、彼の作とほぼ断定できる現存の詩はこの九行だけである（Malone 1967:60）。ラテン語版の『教会史』では、ケドモンの詩はベーダによってラテン語で散文体にパラフレーズされているが、その外にこの本の末尾にノーサンブリア方言による詩の形式での書き込みがある。もっとも、この詩がケドモンの原

作かどうかについては学者の意見は分かれている（Kennedy 1916:xxi-xxii）。ちなみに、『ケドモンの賛歌』はアルフレッド大王が翻訳したと伝えられる『教会史』のウェストサクソン版を含め、四つの版が知られている。この詩は、短いこともあり、高く評価される内容を含んではいないが、古英詩の韻律の原則を踏まえて書かれている。

**『十字架の夢』** *The Dream of the Rood*

この詩は十字架について見た夢を詩の形式に整えたものである。「ヴェルチェルリ写本」に収録されている一五六行から成る詩以外に、スコットランドのRuthwellにある巨大な石の十字架にルーン文字で刻まれた碑文にこの詩の一部が含まれていて、碑文は八世紀初頭、詩は九世紀後半の作とみなされている（Kennedy 1952:79）。この詩は終始一人称で書かれていて、詩全体は三つの部分から成っている。第一部（一―二七行）では、夢を見た人が十字架の様子を詳しく語る。第二部（二八―一二一行）ではその十字架が発した言葉が述べられ、話者は自分が真の十字架を見たこと、それから自分に話しかけ、森の中で生えていた木であった時からカルヴァリでキリストを上に乗せてから数世紀経て発見され、崇拝の対象とされるまでの自身の経歴を語り、ついで十字架は夢を見ている人にその崇拝を促す。最後に、第三部（一二二―一五六行）では、十字架の夢を見た人がこの十字架によって自分の人生が大きく変えられ、それ以来、彼は真の十字架の崇拝に打ち込み、それによって天国の住まいを得ることを望むようになったことを語る。

この詩に言及する学者はいずれもこの詩を高く評価し、たとえば、Malone（1967:78）は「導入部の言葉はこれ以上には作り得ず、カルヴァリでのキリストの十字架の物語は圧倒的な詩的な力と美しさをもっている」と絶賛し、「古英詩のみならず、英文学全体の誇りとすべきもの」と述べている。今回の翻訳の底本としてSwanton（1987）を主に用いた。

『脚韻詩』 *The Riming Poem*

この詩は一般に『脚韻詩』と呼ばれているが、これは、この詩では通常の頭韻に加えて脚韻も同時に用いられているためである。頭韻について見てみると、二重頭韻は一般には第一半行の約半分に実現しているにすぎないが、この詩ではすべての第一半行に完全に実現していて、これだけでも相当高度な技術が必要とされる。一方、脚韻について見てみると、偶然ではなく意図的に脚韻が用いられているのは『ヘレナ』の末尾の一五行（一二三六－一二五〇行）と『脚韻詩』以外の古英詩には見当たらないが、この詩ではすべての行に脚韻が実現している。頭韻も脚韻も共に詩の形式上の技巧であって、内容に関わるものではない。しかし、韻の形式を整えるために臨時語（nonce words）をほとんどの行に使わざるをえなくなり、その結果として、この詩は内容を理解するのがきわめて難解なものとなっている。

詩人は自分の出生から語り始め、華々しかったこの世の経歴の浮沈を逐一たどり、死と墓について語り、この世の生の空しさを強調している。詩人はこの世での人生の浮き沈みというテーマをきわめて厳密に追っているため、彼の詩には一種の堅苦しさが見られる。述べられている出来事は、自伝的な形式をとり、宮廷が詩人の経歴の舞台となっているが、全体として見ると、一般化されたものとなっている（Malone 1967:83-4）。このように、この詩は世俗の栄華のむなしさ、とりわけ、主君や家臣を待ち受けている死という避けられない結末を中心課題とし、神の恩寵は地上の人間の生活において唯一の希望の光であることを説いている。この翻訳は主としてMuir(1994)の刊本に基づいている。

『デーオル』 *Deor*

この詩は、主君の寵愛がライバルの歌い手に移ってしまった吟遊詩人の嘆きを唄ったものである。この点で、この詩は『平家物

語』に登場する平清盛の寵愛を失った祇王・祇女という二人の白拍子の悲話に通じるところがある。デーオルと自称する詩人は遠い昔の不幸な出来事を思い起こすことによって、自身に降りかかった不幸の慰めを得ようとする。そして、古英詩ではこの詩と『ウルフとエアドワセル』以外には用いられていない「折り返し句」(refrain) の中で、「昔の人々の苦悩が過ぎ去ったように、自分の苦悩も過ぎ去りますように」という希望を表明している。

昔の不幸な出来事とは、たとえば、ゲルマンの高名な伝説上の刀工ウェールンドがニースハードに捕らえられて迫害され、悲惨な思いをさせられたこと、メースヒルドに対するイェーアトの愛が際限なく深まり、眠りを奪われるという悲恋を味わったこと、ゴト族が残忍な王エオルマンリーチに支配され、深い悲しみに沈んでいたこと、などである。しかし、詩人のテーマは過去の特定の不幸の事例にあるのではなく、六番目の節で要約されているとおり、この世のいかなる苦悩も、幸福と同様、永久に続くものではなく、必ず終結するということである。もっとも、六番目の節は後世の追加とみなす意見もあり、さらに、この節はこの詩のテーマの要約として詩人がみずから追加したものであるとする説もある。

作者と思われる人物が実際にこの詩を作ったとなると、六世紀より遅いとみなすことはできない。しかし、その頃の詩人だとしたら、六世紀末に英国に伝えられたキリスト教の色彩を帯びたこのような詩は作れなかったであろう。目下のところ、一〇世紀頃の作とみなすのが妥当であろう (Malone 1967:49)。

**『ウィードシース』** *Widsith*

この詩は三世紀から六世紀頃のいわゆる「ゲルマンの英雄時代」の数多くの英雄を覚えやすいthula (〈古ノルド語のþula'arote'「機械的記憶、反復」) と呼ばれる形式に整え、一覧表にしたものである。「序」に相当する最初の九行では、架空の詩人ウィー

ドシースの系統と旅立ちの経緯が述べられている。ついで、詩人は長い宮廷詩人としての経験の中で見聞きした諸王とその統治の様子、および国々についての詳細を語る（一〇―一三四行）。最初のthulaは七世紀後半頃に作られた最も初期の古英詩の一部とみなされていて、ここでは「AはBを治めた」という型にのっとり、三五行目の「オッファはオンイェル族、アレウィーヒはデネ族を治めた」で頂点に達する。

詩人は五〇行から個人的な出来事を哀感を込めて述べ始めるが、自分が歌で成功したことを強調して終える。この後、「私は何々族のところにいた」という型の第二のthulaが続く。ブルイェンド族の王グースヘレやロンバルド族の王エルフウィネの気前のよさを称えた後、エオルマンリーチとその妃からの贈り物に対して最大の賛辞を述べる。

三番目のthula（一〇九―一三〇行）では「私はだれだれを訪れた」という型に従い、数多くの王たちの統治と知恵に言及している。詩の末尾の九行の後書きは、個人的な前書きとは異なり、寛大で大切に処遇してくれる王侯貴族を求めて止まないすべての吟遊詩人のあるべき姿について述べている。

この詩は英雄詩そのものではなく、また、高く評価できる内容を含まず、人名・地名の一覧表にすぎないとも言えるが、一四三行の中に一五〇以上の固有名詞を盛り込み、なおかつゲルマンの頭韻詩の伝統にのっとり、破綻なく詩を完成させている詩人の技は見事という外はない。さらに、当時の吟遊詩人の知識や生活態度がうかがえる興味深い詩ともなっている。この詩の底本は目下のところ今回の翻訳に活用したMalone(1962)が最も詳しい。

# 参考文献


Fry, Donald K. (ed.) 1974. *Finnsburg Fragment and Episode*. London: Methuen.

Greenfield, Stanley B. 1965. *A Critical History of Old English Literature*. London: University of London Press.

Klaeber, Frederick Fr. (ed.) 1950. *Beowulf and The Fight at Finnsburg*. Boston: Heath.

Kunihara, Kichinosuke. (国原吉之助) (訳) 一九六. タキトゥス『ゲルマニア　アグリコラ』(ちくま学芸文庫) 東京: 筑摩書房。

Malone, Kemp. (ed.) 1962. *Widsith*. Copenhagen: Rosenkilde and Bagger.

Malone, Kemp, and Albert C. Baugh. 1967. *Literary History of England*. Vol. 1. London: Routledge & Kegan Paul.

Malone, Kemp. (ed.) 1977. *Deor*. Exeter: University of Exeter Press.

Miller, Thomas. (ed.) 1959. *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*. (EETS OS 95, 96, 110, 111) London: Oxford University Press.

Muir, Bernard J. (ed.) 1994. *The Exeter Anthology of Old English Poetry*. 2 vols. Exeter: University of Exeter Press.

Sedgefield, William J. (ed.) 1928. *An Anglo-Saxon Book of Verse and Prose*. Manchester: Manchester University Press.

Swanton, Michael. (ed.) 1987. *The Dream of the Rood*. Exeter: University of Exeter Press.

Whitelock, Dorothy. (ed.) 1967. *Sweet's Anglo-Saxon Reader: In Prose and Verse*. Oxford: Clarendon Press.

Zettersten, Arne. (ed.) 1979. *Waldere*. Manchester: Manchester University Press.